

審査結果の要旨

氏名 姜 昌 一

本論文は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本が朝鮮を植民地化する過程において、朝鮮で活動した日本民間活動家「朝鮮浪人」の思想と行動を手がかりとして、アジア主義の実態と概念を再検討したものである。従来、その政治的力量と影響力が過小評価されてきたため、実証的研究を欠いたまま論ぜられることが多かった朝鮮浪人に関して、一次史料に基づいた精緻な分析を行い、日韓の最新の研究成果を取り入れて完成された初めての本格的な研究でもある。

竹内好美など従来の分析が、「侵略と連帯」という概念にとらわれ、心情的理解をひきずっていることに疑問を呈し、政治活動家・思想家としての朝鮮浪人の行動と思想を、「支那浪人」のそれと対比しながら実証的に解明し、アジア主義の実態を追求している。日本と朝鮮の関係を巡って生じた、日清戦争と並行する1894年の東学農民戦争、一般に閔妃事件として知られている1895年の朝鮮皇后殺害事件、日韓合邦運動、という3つの歴史的事件を中心にすえて、朝鮮浪人と彼らに呼応する朝鮮人政治活動家の行動と思想を検討している。

第1章「東学農民戦争と天佑侠」では、従来、実証的研究に欠けていた、朝鮮浪人の政治団体「天佑侠」の人的構成と行動を解明し、明治第3世代の青年である彼らが、朝鮮政府に反旗を翻し、日本軍とも衝突する農民軍側に同調と連帯を示すところに、日本とアジアとの連合を企画する思想的特質を見出している。

第2章「明成王后殺害事件と「朝鮮浪人」」では、1895年、朝鮮駐劄公使指揮下に行われた朝鮮の皇后殺害事件に参加した朝鮮浪人の動向を分析し、相互の政治的関係と個々の人物の役割を明らかにして、アジア主義と現実政治との関係性を観察している。

第3章「黒竜会の結成と活動（1901年—1904年）」では、黒竜会の人的構成および活動とアジア主義思想との関係が解明された。

第4章「黒竜会と一進会の「日韓合邦」運動」では、韓国では親日派（対日協力者）の売国団体と評価される朝鮮人政治団体「一進会」と黒竜会との関係を分析し、両者の日韓合邦論が、中国周辺部の東夷北狄民族を大同団結させるというアジア主義で通底し、西欧列強に対抗する大アジア帝国構想という点で一致したことが指摘されている。

第5章「「朝鮮浪人」の大アジア主義」では、樽井藤吉ら代表的なアジア主義者の思想的検討の上に、天佑侠のアジア体験と認識の分析を通じて、中国に進出した支那浪人の同文同種という人種主義に対して、朝鮮浪人が同文同祖という血統主義的認識をもっていたことが、同じくアジア主義という範疇の中にありながらも、行動と思想面での差異として発現すると結論的に提示した。

本論文では、従来その実態が明らかでなかった朝鮮浪人の性格を実証的に解明し、それを通じてアジア主義がもっている重層性、多様性を剔出した。近代東アジアの政治史・思想史研究に投じた一石は小さくないものと思料される。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。